

第14回

春日井市交響楽団定期演奏会

Kasugai City Philharmonic Orchestra

2005年7月17日(日)

15時 開演
春日井市民会館

ごあいさつ



ごあいさつ

春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
鵜飼 一郎

夏空がまぶしく感じられるころとなりました。今日は、第14回春日井市交響楽団定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

本楽団のメンバーが、日頃の練習の成果を披露できる場として、毎年この時期に定期演奏会を開催できますことは、ひとえに関係各位および市民の皆様方の温かいご支援の賜物と感謝申し上げます。

今回は、ソリストに日本を代表する国際的ヴァイオリニストであり、昨年3月には日本芸術院賞を受賞されました前橋汀子氏をお招きいたしました。名古屋を中心にご活躍の吉住典洋氏の指揮のもと、前橋氏の優雅さと円熟味溢れるヴァイオリンの演奏、さらには管弦楽のハーモニーが会場に広がり、皆様に必ずや至福のひとつときを過ごしていただけるものと確信いたしております。

本市では、「春日井市文化振興基本条例」を核として、市民一人ひとりの文化活動を支援し、さまざまな施策を進めることにより、文化のまちづくりを推進しております。今後も文化に対する市民の皆様方の関心と理解を深めていただくよう努めてまいりますので、本楽団共々、皆様方のさらなるご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

それでは、今日のこのひとときを存分にお楽しみください。



ごあいさつ

春日井市交響楽団
会長

中部大学 学監
三浦 昌夫

春日井市民のオーケストラであります春日井市交響楽団の第14回定期演奏会によるごあいさつをいただきました。今回は、ソリストに前橋汀子さんをお迎えすることができました。前橋さんは、今年の7月、中部大学キャンパス・コンサートの「ライナー・キュッヒル ヴァイオリン・リサイタル」を聴きに春日井へおいでになりました。演奏後、ウイーン・フィルのコンサート・マスターであるキュッヒルさんと歓談して直ぐに東京へお帰りになりました。そのとき、本日の定演へのご出演と昨日の中部大学キャンパス・コンサートへのご出演を快くお引き受け下さいました。私たち春日井市の音楽ファンにとって、夢が実現した瞬間でした。

さあ、一年間、待ちに待った日が訪れました。春日井市交響楽団も研鑽に努めました。いま、前橋さんが、吉住典洋さんの指揮でメンデルスゾーンの「ヴァイオリン協奏曲」を春日井市交響楽団のオーケストラとともに演奏します。興奮を禁じえません。

さらに、春日井市交響楽団は、《売られた花嫁》の序曲とベートーヴェンの交響曲第6番「田園」にも挑戦します。どちらも、それぞれに違った意味で難曲で、名曲です。難度の高い技巧を要求するとても速い音楽と精神的に気高い音楽と。

12月の「春日井市民第九演奏会」と共に、本日の演奏会もまた、常に市民の音楽意欲を高め、常に市民の音楽の欲求を満足させる春日井市交響楽団の日々の活動の成果として、親しくお聴きいただければ幸いです。

では、真夏の夢の協演をごゆっくりお楽しみ下さい。

プログラム Program

スメタナ (1824-1884) 作曲

Bedřich Smetana

歌劇《売られた花嫁》序曲

OVERTURE

to the opera

“THE BARTERED BRIDE”

(Prodaná nevěsta)

メンデルスゾーン (1809-1847) 作曲

Felix Mendelssohn Bartholdy

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

Konzert für Violine und Orchester e-moll Op. 64

- 第1楽章 Allegro molto appassionato : 快活に速く、極めて感情豊かに
第2楽章 Andante : ほどよくゆっくり
第3楽章 Allegretto non troppo — : 快活にやや速く、はなはだしくなく
Allegro molto vivace — 快活に速く、きわめて活発に

《休憩》 Intermission

ベートーヴェン (1770-1827) 作曲

Ludwig van Beethoven

交響曲 第6番 へ長調 作品68 「田園」

Symphonie Nr. 6 (Pastorale) F-dur Op.64

- 第1楽章 Allegro ma non troppo : 「いなかに着いたときの愉快的な感情の目覚め」
第2楽章 Andante molto moto : 「小川のほとりの景色」
第3楽章 Allegro : 「いなかの人々の楽しいつどい」
第4楽章 Allegro : 「雷雨 嵐」
第5楽章 Allegretto : 「牧人の歌 あらしの後の喜びと感謝の感情」

ヴァイオリン独奏 前橋 汀子
指揮 吉住 典洋
演奏 春日井市交響楽団

プロフィール



ヴァイオリン独奏
前橋 汀子

Teiko Maehashi

photo:篠山紀信

5歳から小野アンナにヴァイオリンを学び、その後、斎藤雄雄、ジャンヌ・イスナールに師事。17歳で、旧ソ連国立レニングラード音楽院創立100年記念の一環として、日本人初の留学生に選ばれ、ミハイロ・ヴァイマンのもとで3年間学んだ。

その後、ニューヨーク・ジュリアード音楽院でロバート・マン、ドロシー・ディレイ等の指導を受け、さらにスイスでヨーゼフ・シゲッティ、ナタン・ミルシュテインの薫陶を受けた。

レオポルド・ストコフスキーの指揮により、ニューヨーク・カーネギーホールにデビュー。その後、国内外で活発な演奏活動を展開、ベルリン・フィルをはじめ、世界各国の代表的なオーケストラと共演。指揮者もメータ、ロストロポーヴィッチ、ケンペ、サヴァリッシュ、マズア、小澤征爾ほか多彩なマエストロたちと共演。

最近では、ヴァイオリン音楽の原点ともいえるJ.S.バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームスなどの作品の研究と演奏にさらに力を注ぐ一方、珠玉の小品を中心とした心暖まるリサイタルも全国各地で行っている。

2004年、日本芸術院賞を受賞。
現在、東京芸術大学、大阪音楽大学で後進の指導にも当たっている。



指揮
吉住 典洋

Norihiro Yoshizumi

愛媛県今治市生まれ。大学在学中より指揮活動を開始。名古屋二期会、中川良平のTokyo Bach-Bandなど数々のオペラ、ミュージカル等のアシスタントを務める。1999年、名古屋市文化振興事業財団主催「かるめん・じょんず」(原作 G.Bizet: Carmen) の公演中に急遽指揮を命ぜられピット・デビュー、好評を得た。以後、「ヘンゼルとグレーテル」「フィガロの結婚」「オペラを作ろう『小さな煙突掃除屋さん』」などの作品を指揮する。2005年から劇団四季「オペラ座の怪人」ロングラン公演に参加。オーケストラではセントラル愛知交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団に出演するなど東海地方を中心に活躍している。

愛知県芸術大学管打楽器コース卒業、研究生を経て同大学大学院音楽研究科終了、よんでん文化振興財団奨学生。現在同大学非常勤講師。

よしづみ語録

- ★「田園」の練習から (文責: F1.宮田義郎)
- ・豊かな自然の中で恩恵を授かって書いたベートーヴェンの日常なんです。素朴なことにトキメキを覚えながら、無心に音楽に向き合しましょう。
- ・Pは音の豊かさを。スタッカートははずむような音のタッチ、躍動感、何かが起こるであろう期待感を持って。
- ・きれいだけのノッペラボウではなく、自然のエネルギー、動きを感じるように。
- ・絶対にフレーズは止めないで。どこまでもフレーズが伸びていく、音が伸びていく、川のせせらぎが続くように。(2楽章)
- ・4拍目から1拍目に行くとき、エネルギーが満ち溢れる。(2楽章)
- ・相手の音をもらうのではなく、受け取りに行く。棒に振られない、棒を振りに行く。(4楽章)
- ・相手を作ってくれたリズムを自分の中に取り込んでいく。(5楽章)
- ・汚くしないということは、音を怒らせないこと。(5楽章)

オーケストラ 春日井市交響楽団 Kasugai City Philharmonic Orchestra

市民オーケである春日井市交響楽団は、ベートーヴェンの「第九交響曲」の演奏会を春日井でも開きたいという市民の要請から生まれました。それを受けて、「市民が演奏し・市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」として、市内の音楽愛好家を中心に、1990年(平成2年)11月に創立されました。愛称「カポ」(KAPO)は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カポ」(capo 頭・先頭に立つ者)の思いもあります。毎年、7月の定期演奏会と12月の「春日井市民第九演奏会」を中心に、数多くのオーケストラ活動を行っています。団員は、会社員・公務員・教員・医師・主婦・学生・自営業者などからなる60名。私たちにとって最大の喜びは、一人でも多くみなさまに演奏会においていただき、クラシック音楽が好きになっていただくことです。そのために、「春日井で名曲の名演奏を」と心がけています。また、「春日井の開かれた音楽の窓」となって国の内外の最高の音楽家との共演にも努めています。これからも、さらに、市民のみなさまに親しまれ、愛されるカポとして、市民音楽活動につづけて参ります。温かいご支援をお願いいたします。

曲目解説

本日のこのプログラム・ビルディングをご覧下さい。
まさに、いま、春日井市交響楽団が市民のみなさまにお聴きいただきたい最高の曲目をそろえました。それに、ソリストには、最高のヴァイオリニスト前橋汀子さんをお迎えすることができました。では、まず、爽快な《売られた花嫁》序曲からお聴きください。

歌劇《売られた花嫁》より
「序曲」

ベドルジハ・スメタナ(1824-1884)作曲

この世に、どんなに速く演奏しても速すぎるのではない序曲が三つあります。モーツァルトの《フィガロの結婚》序曲とグリムカの《ルスランとリュドミラ》序曲とこのスメタナの《売られた花嫁》序曲(1866)です。どれも、1小節を1拍にとり、大きな4拍子にして数えなければ、とてもテンポに追いつくものではありません。ベートーヴェンの楽譜によく見られる「リトモ・デ・クアトロ・バットゥティ」です。



「ボヘミア人は枕の下にヴァイオリンを入れて生まれてくる」と言われるほど、昔から彼らは豊かな音楽の才能に恵まれた民族です。ボヘミアの代表的傑作オペラ《売られた花嫁》は、まさに歌と踊りに満ちあふれた本場の味でした。

それは、衣装や踊りに見られる民族色も最大の魅力ですが、特に国民主義を標榜するこのオペラでは、長い年月を掛けて国民の趣向を具体化していったという歴史の重さと、誰にも分る大衆歌劇たるべく良く練上げられた無理のない演出とを感じさせたという点で、国民歌劇本来の「売られた花嫁」だったといえましょう。しかし、その分だけローカル色が強く、全体に演技が説明的になり、国際性を持った芸術オペラとしてのコクに欠けるところがあったのはいたしかたのないことです。

ボヘミアの民族舞曲を元にしたとても速い音楽です。農夫の娘マジェンカは父親の借金の形に、「地主のミーハの息子の嫁になること」という契約書と一緒に売られていきます。ところが愛する若者イェニークが地主の先妻の息子と分かってめでたしめでたしとなります。

ヴァイオリン協奏曲

メンデルスゾーン(1809-1847)作曲

この曲は、4大ヴァイオリン協奏曲のなかでも、もっともロマンティックで、甘美で優しく、初々しい魅

力に満ちています。ベートーヴェンのように英雄的性格を大声で強調することもなく、ブラームスのように精神主義偏重の形式主義者風に構えるのでもなく、チャイコフスキーのようにことさらに華美な技巧を銜うものでもありません。「笑わないでくれ。恥ずかしいが大いに迷っているのだ」と天分豊かな彼にしては珍しく、構想してから完成までに6年を費やして、メンデルスゾーンが35歳の1844年に完成しました。メンデルスゾーンが指揮をしていたゲヴァントハウス・オーケストラのコンサート・マスターしていたフェルディナント・ダヴィットのソロ、デンマークの作曲家ニールス・ガーデの指揮で初演され、大成功を納めました。

3楽章をつづけて演奏する単一楽章のヴァイオリン協奏曲の形式をとり、第1楽章の最初からソロ・ヴァイオリンが主題を演奏する破格の協奏曲形式となっています。第1楽章が終わってもファゴットだけが単音で吹き続けてそのまま静かな第2楽章へと入っていきます。これは聴衆の拍手を防ぐためだと言われていて、それがすべて成功してるのですから、だれも笑ったりしません。メンデルスゾーンは、ヴァイオリン協奏曲の初演から二年あまりで亡くなります。当時最高のピアニストであり、最高の指揮者であり、最高の人文主義者であり、バッハの「マタイ受難曲」の復活上演など、音楽史上、多くの偉業を打ち立てたメンデルスゾーン - 38歳の若さでの死でした。

交響曲第6番「田園」

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン
(1770-1827)作曲

交響曲第6番「田園」は、ベートーヴェンの中期の「傑作の森」の作品群の一つで、第5番「運命」やピアノ協奏曲第4番などと共に初演されました。1806年、作曲者37歳の時でした。この二つの交響曲「田園」と「運命」について考えてみますと、両者とも同時に作曲が開始され(1805年)、同時に完成・初演されたことは、その充実度からいっても、その全くの異質性からいっても驚くべきものがあります。特に「田園」は、自然の素晴らしさを謳歌する人間の喜びに満ちていて、ベートーヴェンの交響曲の内でも、終始、温かい人間らしさを感じられる人生肯定的な音楽となっています。管弦楽も誠に美しい澄んだ音響を一貫して保ち、管と弦の織りなす華麗な音色とまろやかな響きは、心技ともに最高の境地に